合さい袋

三木青郎

築地小劇場建築への期待

今までバラックのまゝ興行して來た築地小劇場では、今年の八月限りでバラック認定期間が切れるので、いよいよ改築することとなり、その設計を川喜田煉七郎君にたのんだとのことである。これに就ては、同劇場の土方與志君であつたかが數日前の東京朝日にも書いてゐた樣だつた。新聞で見ると、こんどの小劇場は鐵筋コンクリート造りで、延坪五百坪程のモダン建築になるとのことだ。

ところで、このニュースをきいて、私がいみじくも密かに會心　笑みを洩らしたいわれは、かかつて次の事がらに存する。

從來、多くの建築家――上はブルジョアの大邸宅や大ビルディングを設計される何某博士から、下は僅かに郊外の文化住宅の物置の修繕ぐらひを仕事としてゐる何某大工氏に至るまで、おしなべて――が、「依頼者の註文」と云ふ有難くない制ちゆうを加へられるために、その豐富なる建築的手腕を、充分に發揮出來ないで、嘆かはしくもその作品を中途半端なものとせねばならなかつた事實だ。

餅は餅屋でと云ふ言葉さえあるのだから、こと建築に關する限り、何某博士又は大工氏の專門的技能に安心して委任して置いて然るべきものを、下手な註文をするものだから、却つて不味いものが出來上つてしまうのだ。

ところが今度の依頼者はこの點で、恐らくそう下らぬ註文を出す樣な分らず屋ではない筈だし、引き受けた川喜田君は、さきにソ聯邦ウクライナ樂劇場の國際懸賞設計に、優秀な成績で入選した逸才。自然そこに生れでる新らしき小劇場の建築に對して、大きな期待が湧いて來ようと云ふものだ。餅は餅屋での筆法を借りるなら、小劇場は川喜田君以上に信頼出來る餅屋は求め得なかつたであらうし、川喜田君にしても、小劇場ほどもの分りのよい――川喜田君の技術を素直に受け容れてくれる――相手を見出すことは、ちよつと困難だらうと思はれる。

川喜田君が小劇場の設計を引き受けたとのニュースに、私は以上思ひ浮べて、餅屋が餅を引き受けた！　と手を打つたのだ。そこには一分のスキも見出すことが出來ないほど、この取組はぴつたりしてゐる。

日本劇場へちよつと

一年あまり數寄屋橋畔に裸體をさらしてゐた日本映畫劇場が、大川平三郎翁の骨折りで、今月から再び工事が始められ、いよいよ着物を着るさうである（東京日日）。

諸君はどうか知らんが、私はあのコンクリート打ちつ放しの、流行の言葉で云へばプロテスクな、ラフな感じの裸姿に一種の魅力――松の幹のような腕を持つてゐる田舍娘の健康さに對するにも似た――を覺えてゐたものだ。大川さんはあの姿を醜惡と評してゐるけれども、私はあの中にこそ飾らざる、卽ちどうすることも出來ない、嚙んでふくめる樣に云へば、犯しがたい美のあることを感じてゐたのだ。私はひそかにあの姿を愛してさえゐた。だから、「やつと着物をきる」と云ふ新聞記事を見つけた時は、輕い失望すら感じた程だ。惜しいと云ふ氣持である。あれだけの建物を立ち腐されにして置くいわれはないから、工事を續行するのは大いによからう。しかし、外部は最早現在のままで打ち切つてしまつて、多分タイルか石を張るのであらうその金を、全部内部仕上げにかけて仕舞つたらどうであらうか。石にしてもタイルにしても相當の金をかけなければ、彼の姿全體に着物をきせるわけに行くまい。金をかけて平凡な外觀にしてしまうなら、むしろその金で内部をより一層きらびやかならしめた方が、劇場の宣傳的意味に於ても、遙かにまさるところがあるであらう。外部はただ透明の防水劑を塗れば事たりる。

尤も、どうせそんな度胸があらうとは思はれないから、これはほんの耳打ちばなし的に云つて見るまでの事である。

今月は劇場のことばかりかいてしまつた。

8.2.25